

岡倉天心について

——明治精神の一考察——

森　　ひ　　で　　子

はじめに

天心岡倉覚三（一八六二—一九一三）の名を世に知らしめたのは、英文の三著『東洋の理想』（The Ideals of the East, 1903）・『日本の覚醒』（The Awakening of Japan, 1904）・『茶の本』（The Book of Tea, 1906）である。

このうち、最もよく知られているのが『茶の本』であって、本書は一応明治日本を代表する名著の一つとして、今日なお必読の書として親しまれている。

しかし、天心への評価は、果たして現在までどのようになされてきたであろうか。彼はその成した仕事の性質から、明治期における国粹主義的伝統美術の擁護者、美術行政家、美術史家と呼ばれ、また単に、風変りな美術指導者くらいに片付けられてきたのではないだろうか。

その上、『東洋の理想』の冒頭の有名な言葉「アジアは一つ」ゆえに、第二次大戦中には、彼の著作は、侵略主義の代表の書物として利用され、戦後はGHQによって、天心の思想は超国家主義と烙印され『天心全集』の統刊を禁じられたほどであった。

このように、天心の仕事が多岐であったばかりでなく、その評価も、時代により立場により、受け取られ方も複雑であったので、彼は明治思想界のどのジャンルにも属さぬまま、一般にはあいまいな状態で理解されてきたのであ

る。そして、必要以上に「英雄視」されたり、時にはするどい批判をあげせられたりしたのである。

天心の愛弟子横山大観は、「天心は英雄であり、偉人であり、計り知れないものである。我々のような小さなものにはとうていわかりえない」と語ったと言われるし、根岸時代の天心の友人である幸田露伴も、「天心岡倉先生、識見高明、手腕円滑、芸術の世界に於て好く能く人の徳を成す。(中略)噫、先生の徳亦大なるかな」と、絶讃を惜しまなかった。

また一方では、こうした天心の「再認識」を望む声も少なくない。島崎藤村は感想集『桃の雫』（昭和六年）の中で「再吟味といえば、当然それをされていい人で、未だなおざりにされている明治時代のすぐれた人もある。岡倉覚三の生涯などはその一つに数ふべきであろう」と述べているし、河上徹太郎氏は『日本のアウトサイダー』（昭和三四年）の中で、「岡倉天心に対する評価は、現在まだ定説が出ていないようである。そして或は後世このままで終るのではないかという気もする」と述べている。更に、竹内好氏は『朝日ジャーナル』（昭和三七年）の中で、次のように述べている。「天心はあつかいにくい思想家であり、またある意味で危険な思想家である。あつかいにくいのは、彼の思想が定型化を拒むものを持っているからであり、危険なのは、不断に放射能をばらまく性質を持っているからである。うっかりふれるとやけどする恐れがある」と。「群盲象を評す」とは、天心に向ってよく言われる言葉であるが、天心はそのように偉大で、あつかいにくいのであろうか。^①

確かに、明治思想史における天心の「位置づけ」は困難であるかも知れない。しかし、そうした「位置づけ」を急ぐよりも、まず、私は、明治に生きた天心が、どのような方向に日本美術を導いていったか、また、天心のアメリカ及びヨーロッパ理解、東洋の伝統・歴史に対する考え方が如何なるものであったか、人間としての天心はどうであったかの再検討を、ここで試みたいのである。

岡倉天心の直系の孫岡倉古志郎氏は、昭和三十七年五月の朝日新聞紙上に、天心生誕百年を迎えるにあたって寄せた「祖父天心のこと」と題する一文の中で、次のように述べている。

「私が切に望みたいのは、生誕百年を契機として、人間天心の生涯と思想をありのままに収録し、公正に評価してほしいということである。」

戦前・戦中・戦後の天心の評価の歴史を考察しながら、人間天心の一生を明確にし、今日的立場から天心の「公正な評価」に近づくのが、本論文の主たる目的である。

本 論

一 概 観

天心の生涯における業績は、第一は、東京美術学校を創設し、美術教育の基礎を定めたこと、およびそれに付帯する古美術保存などの社会美術教育の事業である。第二は、その美術学校を追われたあとで、これに対抗する日本美術院をたてた事業である。第三は、その少し後ではじまる英文による著作活動、それと、ボストン美術館の東洋部長としての海外での活動である。

第一の、いわゆる官僚時代を前期（明治一五年から三〇年、天心二一歳から三六歳）、第二、第三の、官僚を追われてからの活動を後期（明治三二年から大正二年、天心三七歳から歿まで）として論をすすめてゆきたい。

さて、清見陸郎氏は、その著『岡倉天心伝』（昭和一三年）の冒頭で次のように述べている。

「五二年の生涯を東洋の伝統と芸術との発揚の為にささげた天心岡倉覚三が、幕末、黒船の脅威によって開港を余儀なくされた横浜に呱呱の声を上げたといふことは、一の皮肉のやうであつて、実はこの天才児の一生を規定する重大な事実であつた。稀有なる彼が語学の才能も、この外国文化渡来の関門地に生れたといふことに多くの原因を持ってをり……。」

このように、幼少時から当時としてはいち早く英語を習得し、同時に、漢籍の勉強もすすめていたといふことは、^①表面的に解釈すると、天心が意識的にも、無意識的にも、一度に流れ込んだ西洋文明の受容力と、東洋文明の対応力

とを鋭敏に備えていたと断定を下すこともできる。かつまた、清見氏は、次のように述べている。

「保守的進歩派であり、同時に進歩的保守派であった彼の生涯は、蓋しこの彼自身の天資の中に潜められた二元性に因するのだった。」

相反する二つの文明、すなわち東洋の自然哲学と西洋のヒューマニズムの対決が、明治文化の特質であると考えるならば、明治文化の葛藤は、そのまま、天心の葛藤として背負うことになるのである。

しかし、問題は、彼が西洋をどの程度理解し、咀嚼しようとするかという点である。それは、本文で徐々に述べてゆくつもりである。

天心の大学在学期は、自由民権イデオログが、絶対主義政権に対する一大勢力を伸生した時代であったが、天心はこの自由民権に全くふれ合わず、彼の教養と知識とは、政治的保守主義とむすびついて成長したことを、まず想起せねばなるまい。

そして、大学卒業後^①、直ちに文部省の役人となり、^② 国粹美術保存運動を精力的に行なったのである。

しかし、天心の活動を、前期を公的活動、後期を私的活動と、真二つに分けるのは即断であると思う。特に、彼の前期を通じての活動が、明治政府の庇護を受けたというより、むしろ、自由民権弾圧後の、政府の反動政策による国粹気運を利用したとみることも出来るのではないだろうか。^③

いずれにせよ、結果的には、天心が官僚的任務に忠実である一面を持っていたことは事実であり、まず、この点から、その史実をたどってみたい。

二 前 期

(一) 書道論争について 前期の天心の活動の出発点にあたるものが、明治一五年に彼が発表した最初の美術批評「『書は美術ならず』の論を読む」である。

この論争は、当時の洋画界の重鎮であった小山正太郎が、書が美術でないといったのに対して、小山より五歳年少

の天心が逐一論駁したのである。論点のいちいち省くが、小山が「書は高価を以て海外に輸出する能はず。工藝を進むるの基と為つて、百般の事業振起するの補助たらざる」云々と述べ、書道を無用のものと断定したので、天心は、次のように、鋭く反論した。

「余読んで此に至り、慄然として言ふに堪へざるものあり。嗚呼西洋開化は利慾の開化なり。(中略) 美術を論ずるに金銭の得失を以てせば、大いに其方向を誤り、品位を卑くし、美術の美術たる所以を失はしむるものあり、豈戒めざるべけんや。」

この論争は、河上徹太郎氏の言葉を借りるならば、「小山の実証主義と天心の精神主義」の対立と考えられる。また、竹内好氏は「当時の西洋画と日本画の対立は、時勢の根底にある文明開化対國粹の一現象だった」と述べている。そして、この論争を一つの契機として、明治一五年の農商務省主催の第一回内国絵画共進会に、油絵出品禁止をはじめ、天心一派による洋風画しめ出しが行なわれたのである。^⑤

(1) フェノロサと天心 天心を日本美術に開眼させたのは、その東京大学時代の哲学教師フェノロサ (Fenollosa, Ernest Fransisco. 1853~1908) である。二人は師弟の関係で知り合ったのであるが、両者をより近づけたのは、やはり天心のすぐれた語学力であったと考えられる。

フェノロサが日本美術に興味を持って、打ち込んだのは、日本に来てからの事である。フェノロサが日本美術を研究する、天心が通訳して手伝う、こういった形から、二人は共に古美術に没頭していったのである。

そして、明治一五年に、フェノロサは、竜池会^⑥の請にこたえて、反洋風画、反文人画論を含む「美術真説」という講演を行なったのである。「美術真説」で示されたフェノロサの絵画論は、要約すれば、美術の本質を「妙想」(Idea) であると主張し、油絵は日本画に比べると、実物に擬似しているが、それに擬似することは美術の本質ではないと説いたのである。そして、現代美術に対して、「油絵ハ磨機ノ頂石ニシテ、文人画ハ其底石ニ等シク、真誠ノ美術ハ、其間ニ礎碎セラルガ如シ」との有名な批判を下したのである。土方定一氏は、『日本の近代美術』(昭和四一年) の中

で、フェノロサのこのような美術論を「ヘーゲル美学などといわれるほどのものでなく、現在からみれば、何の要哲もない通俗的な観念的美学の簡単な解説」と評しているし、石井柏亭氏も『日本絵画三代志』（昭和一七年）の中で、同様のことを述べている。^⑨

しかし、フェノロサのこの発言が、政府を動かし、明治の日本画の方向を規定してしまうことになったのである。こうした点から見ると、フェノロサの講演は、栗原信一氏が「フェノロサと明治文化」（昭和一七年）の中で述べているように「明治文化史上に前例のない画期的な講演」であったと思われる。こうして、フェノロサと天心は、明治二二年に東京美術学校が開校となり、具体的成果を得るまで、一心同体となって活躍したのである。この間、彼らの起こした臨時全国宝物取調掛なるものは、今日の文化財保護行政の基礎ともいべき重要なものであった。^⑩

しかし、明治二三年、天心が東京美術学校校長に就任すると同時に、フェノロサは、ボストン美術館の東洋部の管理者に就任するため、帰国の途にいたのである。そして、その後の二人の關係は全く謎々の中に隠れ去るのである。書簡集の中にも、天心がフェノロサに宛てたものは、全く見当らず、両者の交情は、冷却し、疎隔したものである。栗原信一氏は、この点について、次のように述べている。

「フェノロサの行動は『学究的』であり、天心の行動は『天才的』であった。（中略）鑑賞や理解に先後輩の区別はない。弟子は師を凌駕し得ないわけがない。」

とにかく、「水先案内人」としてのフェノロサが、日本を去る時、天心はもうすでに、フェノロサから、何ら吸収するものがなかったと推測することが出来る。それに加えて、美術学校において、美術史と美学の講座を担当したフェノロサの授業が、片言の日本語であったことも影響して、順調にいかなかったことにも、原因があったと思われる。

(三) 視察旅行と帰朝報告　ところで天心とフェノロサは、明治一九年にヨーロッパ視察旅行をしている。これは、文部省と宮内省の協議によって、「美術教育を振起し、美術の発達を誘導する緊急の目的」をもって企てられたもので、在欧中の文部参事官浜尾新を美術取調委員長に任じ、フェノロサと天心を委員に任命し、九か月の予定で派遣

せられたものである。この視察旅行には、内容を示す紀行文のようなものはないので、彼らがどのような視察をしてきたかわからない。しかし、この時の模様を、パリの新聞『フィガロ』紙が、日本の天心とフェノロサは、ルーブル美術館をほとんど素通りしたと冷笑したのは有名である。この逸話は、宮川寅雄氏も指摘するように、「二人の美術視察の一面をついている」と言うことができよう。

そして、翌明治二〇年一月の視察旅行帰朝報告会で、天心は次のように結論を出したのである。「西洋ノ事果シテ本邦ニ適スルヤ否ヤヲ考フルニ一トシテ之ヲ本邦ニ実施スベキモノナシ」と。

当時のヨーロッパ文化は、一八八三年の自然主義全盛期を過ぎて、印象派の時代に入ろうとしていた過渡的な時期であり、一八八九年には、建築史上、近代のシンボルともいべき、パリ・エッフェル塔が完成されていたのである。しかし、天心達は、ヨーロッパ美術を冷静に再認識する心構えもなかったのか、このように台頭する西欧文化から、何ら新しい認識を持ちかえらなかつたのである。そして、ますます東洋美術に誇りをもつようになり、その伸張展開に努力しようとしたのである。

(四) 東京美術学校設立 東京美術学校が開校したのは、明治憲法発布の一〇日前の明治二二年二月一日であった。

明治一三年ごろから国粹主義的傾向が台頭してきて、洋画家が異端視される一方で、自由民権を弾圧した明治政府は、条約改正を意図して欧化政策をおしすすめ、鹿鳴館のはなやかな場面があった。美術学校は、このような背景のもとに、天心の帰朝報告演説を採用して、「西洋画科」を排した純日本の教科内容でスタートしたのである。石井栢亭氏は、このことについて、「兎に角後になってみると甚だ偏頗の処置だった」と述べている。^⑩

一方、美術学校より少し前に開校した東京音楽学校では、最初から日本音楽は問題にされず、洋楽を基礎としてスタートしたのである。このことは、音楽と美術のそれぞれのもつ性質と伝統の違いにもよるだろうが、それぞれの校長であった伊沢修二と天心の考え方の相違（伊沢の合理主義と天心の精神主義）による所が多いと思われる。しかし、芸術教育における両者の存在は、まことに対照的で、また劇的であったと言わねばなるまい。そして、明治二七年の分

期教室制の採用や、美術学校の制服が奈良朝の朝服を採って制定し、「頭に冠帽を戴き、身に闕掖の袍を着けたもの」であったことを考えてみると、天心らの復古精神は時代錯誤といふべき面が強いといわねばならぬ。

(四) 根岸派文士との交流 当時の天心のパーソナリティーと思想を、側面から分析する意味において、天心と根岸派グループとの交友をさぐってみたい。

〔書簡〕 饗庭篁村宛、明治二三年

「久しぶりの雨 禁酒固めを致度 御光臨被下候や 小生參上可仕や 御返答相待候

三十一日

三太夫^④

あへば御前

〃根岸派グループとは、当時天心の住んでいた上根岸、中根岸に住む風流な文筆家同士の集まりのようなものであつて、他に、森田思軒、幸田露伴といったメンバーであつた。この手紙からも分かるように、彼らは風雅を愛しながら、また一方、「禁酒固め」と言つては集まって酒を飲んでいたらしい。

宮川寅雄氏は、天心と〃根岸派グループとの交友について、次のように述べている。

「天心が、一九世紀の先駆的文学グループと結合せず、この根岸派と親交したことは、天心の思想的・文学的立場を逆に暗示しているといつていい。保守性・隱逸性をともないながら、なお仲間うちに外国文学への理解を含む根岸派ほど、天心の心にかなうものはなかった。」

また、林文雄氏は、「岡倉天心への批判」(昭和三年)の中で「彼の学問教養は、有閑階級の消費的娛樂となり、裝飾となり……と、痛烈に評している。

ともかくも、書簡と、二氏の批評からもわかるように、天心が、保守的・趣味的・遊興的雰囲気をもつていたことがわかる。

(六) 東京美術学校校長退職 天心の一人天下のような、東京美術学校校長時代も長くは続かなかつた。明治二九年に

は、学校規則の変更により、それまで、頑固に拒否していた西洋画科を美術学校に入れて認容するという出来事が起ったのである。西洋画科採用の裏には、当時の文相西園寺公望が、黒田清輝と同じ世襲華族出身であったことにも因を発していると言われるが、当時の日本が、日清戦争の勝利により、資本主義の上昇期を迎え、一方、世界認識がさまざまな形で唱えられ、美術界にも浸透するといった時勢も見逃がすわけにはいくまい。

いずれにせよ、この一件は、天心の妥協的譲歩と解釈すべきだと思ふ。しかし、彼は、これを次のように弁明したのである。

「或る論者の難ずる如く、決して洋画を排斥するものにあらず。むしろ先ず日本美術の歴史的根柢をかたくし、さて後に、西洋美術の精華をも斟酌せしめんと欲するなり。」『早稲田文学』明治二十九年一月号所載

このように、不本意ながらも、変節めいたことを宣言しなければならぬあたり、芸術家・思想家としての一貫性に、いささかの疑問を感じさせられる。

その上、天心が美術学校の校長の地位を追われる事件が起きたのは、「西洋画科」の設置から二年後の明治三十一年のことである。ここでくわしく述べることは省略するが、大まかに言えば、彼の不羈奔放な性格を利用した一種のワナが直接的な原因となっているが、竹内好氏は次のように述べている。

「文明開化の風潮への抵抗に生き、その方針で美術学校を経営した天心は、明治政府の体制が整備されてくれば、いつかは教育界から追われる運命にあった。……文明開化と国粋の争いが、体制の安定によって、終止符をうたれたというのが本筋である。」『朝日ジャーナル』四巻二七号、昭和三七年

こうして、天心の復古主義的美術運動が、予備役の立場に衰退し、明治三十年代の日本美術界は、洋画が主流となったのである。

三期

(一) 概観 彼の後半生を語る時、まず注目されることは、その大半を外国で過ごしたという事実である。明治

三四年のインド漫遊旅行を皮切りに、明治三七年にボストン美術館東洋部顧問に就任、死去した大正二年まで、十年間は、毎年の半分をアメリカに住むといった状態だったのである。

天心は、何故晩年のほとんどもを外国生活に求めたのだろうか。この背景には、天心の起こした日本美術院が、思うほど順調に進まなかったことを考慮しなければなるまい。美術院内部の経済状態に破綻がきたこと、院の目指した「新日本画」が、世間で、朦朧体^④の名をもつて不評をかったこと、などがその原因とみられる。

しかし、春草・大観らの画家達は「その日その日のものにも事欠く始末で」「二人はお互いに海に出て魚を釣っては飯の菜をあさる」(大観画談) ような生活を続けた。しかし、世間の非難と、生活苦の中でも「しかし私には前途に大きな希望があり、心の中には芸術に対する燃えるような熱情があり：：：」(同上)、朦朧画として、ひとつのポレミックな姿勢をとって、画きつづけたのである。一方、天心には、「ローマン的アンニユイ」ともみるべきものが訪ずれていたのである。

(二) ボストン美術館時代 丁度こんな折に、ボストン美術館東洋部で、同館所蔵の東洋美術品の整理の仕事が天心に与えられたのである。

アメリカにおいて、天心は厚遇をうけ、ことに、当時ボストン社交界の女王と呼ばれたイザベラ・ガードナー夫人(Isabella Stewart Gardner)を知り、彼女の厚い庇護のもとに活躍することが出来たのである。ガードナー夫人との交友は、天心が彼女に送った書簡から察して、ずい分親交があったらしい。

天心が、第二回目のボストン勤務を終え、その帰路シアトルから夫人に宛てた手紙の中に、「私は奇妙に物淋しさにおそわれています。今はどうも私のものでない処にもどっていくような気がします」(明治三九年)の一文によって、彼の心が日本よりも、外国に傾いていることがうかがえると思うのである。

そして一方、この手紙を出した年の一二月には、日本美術院が、谷中の初音町から、茨城の五浦に移転し、世間で「都落ち」と嘲笑された一件も、彼の日本での立場を暗示するものと言えよう。

(三) 『東洋の理想』その他 天心の思想を論ずる為、『東洋の理想』と『日本の覚醒』を取りあげたいと思う。しかし、岩井忠熊氏が、「天心の業績は、美術にあって思想にない」と述べ、亀井勝一郎氏が、「天心の生涯と事業の歴史にとつて、『東洋の理想』は、一つの段階であつて全部ではない」と述べている点も考へて読むべきと思う。

確かに、ある意味において、当時天心は、日本から疎外された存在であつた。明治三十六年他家に嫁した娘高麗子に宛てた書簡の中に「父も理想に棲み、其理想も幾度か破れて、今は世にもあらぬ身なれども、当初より天然の誠にいたりては、終始一貫の積り……」の一文を見出すことが出来る。二著は、こうした点から考へて「现实生活の逆境をテコにして真情を吐露した」と言えるかも知れない。

天心の印度旅行の直前(一九〇〇)完成した『東洋の理想』と、印度旅行中(一九〇一—一九〇二)に執筆した『日本の覚醒』の二著の中には、彼の思想が各所に表明されているが、これを評すれば、彼の性質の中にあるロマンティックな詩人的思いつきの表現も多く、事態の真相を鋭く見抜く論理性・科学性を欠く点が多いといわねばなるまい。

例えば、天心は「白人禍」「西洋の東洋への侵略」をおそれ、「ヨーロッパの光榮は、アジアの屈辱」であり、これに対抗出来るものは「劍」すなわち「陸海軍の強化政策」が緊急不可欠であると説く点などである。

更に、天心が印度旅行の時に「アジアの姉妹よノ兄弟よノ」と呼びかけ、「我々東洋の快復は、自己の自覚にあり」と述べたり、また、アメリカ滞在中に出版した『日本の覚醒』の中には、武装したアメリカの使節に対して、「心から感謝しなければならぬ」ということばも見出すこともできる。こうした矛盾にみちた卑俗な外交辞令や、へつらいに近いものをみると、天心を思想家と呼ぶにふさわしくない点も持っていたと言えよう。

今一つ、天心の述べた、最も有名な言葉「アジアは一つ」について簡素に述べよう。天心は、日本民族が本来備えている資質というものは、地理的にも、歴史的にも、アジアという統一した文化圏の中に生まれ、はぐくまれて来たものであつて、アジアを外にしては、日本の存在は考えられないと述べている。そして、「究極普遍なるものを求める愛」こそが「すべてのアジア民族の共通の思想的遺産」だと彼は考へ、その愛が「彼らをして、すべての大宗教を

生み出すことを得さしめた」と主張した。

松本三之介氏は『近代日本思想史講座』（昭和三十六年）の中で、「天心のアジア連帯観は、主体的連帯意識を伴わない自然的な連帯感を、改めて強烈な意識の下にさらした」と述べている。これは、同時代の福沢諭吉が「悪友を親しむ者は悪友を免かる可らず」と断然「脱亜論」（明治一八年）を主張した態度と相對立するものであるが、松本三之介氏も述べるように、福沢の主張の方が「むしろ自己に誠実で、合理的」であると言えるかも知れない^⑧。

④ 『茶の本』について 『茶の本』は、明治三九年、ニューヨーク・フォックス・ダーフィー書店から出版され、独文、仏文に訳され、全世界に普及し、アメリカにおいては、本書は教科書にまで採用されたのである。他の二著作も含めて、天心の著書は海外で出版され、読まれ、あとから日本へ逆輸入されたという特異性をもっている。（日本で天心の著作が読まれるようになったのは、昭和に入ってからだと言われている。）

本書が執筆されたのは、丁度、日露戦争の直後にあたり、突如として、日本が欧米に名を広めた時期であったから、本書は、ことに英文で書かれたことも手伝って、驚異の目で読まれたと思われる。

天心が、本書の中で目的としたのは「卑俗な機械文明に屈服している西洋人」に向って、「東洋的静寂主義」を推奨するにあったと言える。天心は『茶の本』の中で次のように述べている。

「茶道は清潔を旨とするが故に、衛生学であり、複雑な贅沢というより、簡素のうちに慰安を教えるが故に、経済学である。それはまた、宇宙に対する我々の比例感を定義するが故に、精神幾何学でもある。茶道はすべての愛好者を趣味上の貴族にすることによって、東洋民主主義の神髄を代表するものである。」

天心は、倫理・宗教・科学・民主主義を美意識によって非論理的・無媒介的に抱擁することで「茶道」を規定したのである^⑨。天心の思想の第一の特色は「美的なるもの」であって、彼の思想は常に美意識＝ロマンチズムという限界から脱却することが、不可能になるのである。

下店静市先生は、天心と茶道について、次のように述べている。

「茶道は、中国古代の世界観である陰陽五行説の二元論的立場に立っている。つまり、その反対概念である、華美々という二つの立場を同時に持っているのである。茶道が長続きし、発展するのは、この二元論のゆえである。しかし、天心は、茶道のもつ一面性のみを強調している。」

つまり、茶道の持つ「質素」と「贅沢」、「不完全性」と「完全性」といった二つの立場に立っていることの認識がなされていないのである。

天心が『茶の本』で言ったのは、中国・インドの長い伝統から生まれた「古いころ」のようなものであり、日本の当時の社会構造とは一致しない間隙があると考えられる。つまり、彼の思想を支配している東洋思想の原理である自然哲学は、過去に理想をおく後戻りの思想で、近代化という急激な流れの中では、前進的な思想とはなり得なかったのである。^⑧

宮川寅雄氏は『岡倉天心』（昭和三年）の中で、次のように述べている。

「『茶の本』は、前の二著に比べて、沈静した書物だった。それは茶の湯に托して、日本の文化と、日本の生活を描き出してみせたエッセイのような小著だった。すべての激烈なものは、かげをひそめて、ユーモアさえ含まれた芸術論だった。」

この本はまた、天心にとって、最後のまとまった書物でもあった。

(四) 晩年の心境 晩年の五浦での生活は、釣りや読書にふける日々であったが、前半期のはなやかさに比べて、天心の心境は、淋しいものにならざるを得なかった。

天心は、生涯の最後の一年をかけて愛したタゴールの姪、インデラ・デビに、一九通におよぶ手紙を送っている。これは「ラブ・レター」であるばかりでなく、天心が誰にも語ることもなかった、自己告白でもある。

〔書簡一〕 After all, my sadness seems to be my pet amusement. I take refuge in my solitude and have a secret festival. My past has been one long struggle after untangible ideals and vain longings, leaving me

worn out, tired and often desirous of the long, long sleep. I wish sometimes to crawl into my shell and sing sad song which is a way of laughing at myself.

..... I long to hide my head in the fold of a gentle, saintly personage and cry, cry, cry. I want to be petted, cuddled and be allowed to do very naughty things.

(結局、私の悲哀は、自分の玩弄物としてゐる娯樂のように見えます。私は常に孤独に逃避し、秘やかな祭りを心に抱くのです。私の過去というものは、触れるなき術や、無価値なあこがれに従つて、長い闘争をつづけてきました。精根を傾けつくした、疲労困憊の私を、誰もかまいつけてくれません。私は時々、長い長いねむりを渴望して止まぬ時がありました。時には自分の殻を這い廻ったり、又、自嘲の一手段でもある悲しい歌を歌つたりします。(中略)私は高貴な、神聖な貴人の衣の襞の間に頭を隠し、そして、泣いて、泣いて、泣き明かしたいのです。私は甘やかされ、抱きしめられ度い、そしてひどい腕白を許しておいてもらいたい。)

〔書簡②〕 I have been a wanderer since twenty..... I am to blame for my own unhappiness. I am wayward and have peculiar idiotic, cranky notions about life which good ordinary people find hard to bear up with.

(私は二〇才の時から、言わばずっと放浪者でした。私自身の不幸は私自身の責めに帰せられるべきです。私は、我意を押し通し、変人で、白痴です。また善良な一般の人なら到底たえられないような、人生に対して狂った考えを持っている人間なのです。)

右の二通は、ごく一部にすぎないが、国際的な英雄と言われた天心にも、晩年にはこんな心境があったのかと思うと驚かされる。七歳の時母を失くし、家庭的な愛情^③にめぐまれず育つた天心が、少年から抱き続けてきた心の訴状でもあった。

〔書簡③〕 All is said and done — nothing remains but to prepare contendedly. I feel like a monarch sitting alone in a great theater and looking at a brilliant performance all by himself.

(あらゆることを為し尽しました——静かに死を待つ以外、何もすべきことは残っていないのです。私はまるで大劇場に一人坐つて、私自身の素晴らしい演技をじつと観ている気持です。)

先に挙げた二通の手紙のような、自嘲的な自己告白を漏らすのも天心であり、右の、死の二か月前の手紙のように、病床に伏しながらも「堂々男子は死んでもいい」と言うのもまた天心であった。絶えず、二つの人格が天心の内部で格闘をつづけてやまなかつたと思われる。

結 論

以上のように、天心の活動を、いろいろの角度からとらえてきたわけであるが、はじめに述べたように、天心の公正な評価に近づけたであろうか。

私は、天心の晩年における悲劇性に焦点をあてて考えてみたい。結局、天心は、美術を自己の使命として取り上げながら、時代に即した、ラジカルな美術内部の進歩を深く追求することが出来なかつたのではないだろうか。

ヨーロッパに対しては、無関心・反感的態度で接し、当時、芸術活動が盛んに行なわれていたフランスを、十分吟味、検討することもなく、東洋の優位性を叫んだのである。そこには西洋に対する偏見もあり、正しい目でみる理解力の欠除がみられる。

大観・春草らの画家達は、天心の理論を「超克」して、それぞれの資質に応じて、日本画革新へすんだのである。そして、彼等のとつた画風が、一時非難をあびたにせよ「日本画の材料をもって、色彩的・感覺的にも清新なもの」²⁰を生み出したのである。

しかし、それまで見捨てられた日本の古美術を、政治的に保護しようとした企ては、当時の反動化した明治政府の一端をあらわすものとはいえ、今日の文化財保護法の基礎をつくつた点は、みとめられるであろう。

彼は、幾多の点で矛盾の人であった。官僚の中にありながら在野精神を持ち合わせていたこと、芸術の問題を取り

上げながら、芸術内部の進歩を究めなかったこと、国粹保存の立場でいながら、国際性をも持っていたこと、帝国主義的イデオロギーをもちながら、ある時は民族主義的思想を持っていたこと、性格的には、封建性と近代的エゴイズムとの両面を持っていたこと、などである。

こうした矛盾の一面のみを強調して、天心を決めつけてはならないと思うのである。天心の矛盾は、明治の持っていた矛盾でもあったのである。その意味において、確かに天心は、よかれ悪しかれ「明治の典型」とみることが出来るよう。

また、第二次大戦において、京都・奈良を爆撃から救ったと言われるウォーナー博士が、かつて、天心に非常な心酔をしていたという事実を考えれば、天心はある意味で、今日の日本文化に大きな貢献をしたと結びつけるのは飛躍であろうか。

色川大吉氏は、近く出版される『日本の名著△岡倉天心▽』（中央公論社）の紹介文の中で、次のように述べている。「岡倉天心は不死鳥である。いくたびも葬られては甦る。日本文明の個性が存在し、他文明との緊張がつづくかぎり、天心は滅びないであろう。」

註

① 宮川寅雄氏は、『岡倉天心』（東大出版会、昭和三十一年）の中で、次のように述べている。「明治前半期的といえば、それにふさわしい、古い時代の醜いモラルを、天心はもちすぎた程持っていた。このような人物を通じて、明治の美術を語るらねばならぬことは、かなり苦痛な仕事だった。同じ時代の人なら、内村鑑三や坪内逍遙を書くことは、どんなにたのしい仕事だろうと思ってもみることもあった。」

② 下村英時氏編の『天心とその書簡』（日研出版社、昭和三十一年）によると、「天心は七、八才ごろから、米人宣教師ジ

ェームス・バラ（James. H. Ballagh）から、英語を習ったらしい。そして、米人家庭のマナーなどもバラ夫妻から学んだところが多いと言われている。」

③ 明治五年（一八七二）、天心一才の時、父、勘右衛門が後妻を娶ったことから、天心は神奈川長延寺にあずけられ、住職の玄道和尚から「大学」「論語」「中庸」「孟子」と漢学の常道を学んだ。この間も、バラ塾へはせっせと通ったらしい。

④ 天心の卒論のテーマは「国家論」であったが、たまたま妊娠中の妻も子がヒステリーを起こし、卒論を焼いてしまった。天心は、残りの二週間で「美術論」を書いたと言われる。

後年、天心は、次のように述懐した。「あれは全くママさんの焼餅が祟ったのだ。おいらは、折角二月かかって書き上げた「国家論」を焼かれてしまったから、已むを得ず二週間「美術論」をでっち上げた。その結果は尻から二番目。而も一生この「美術論」が祟って、こんな人間になってしまったのだ。」(岡倉一雄『父天心』)

⑤ 最初は文部省御用掛、音楽取調掛として就任(明治一三年)し、音楽御雇教師ルーサー・メーソンの助手・通訳をつとめた。日本美術院版の『天心全集』(天心先生略伝)の中には「音楽取調掛としての先生は、当時適材適所を得たる者として、頗る将来を矚望され……」とあるように、天心はかなりの活躍をし、当時の小学校唱歌「富士山」(八高根に雪ぞつもりたる、麓に雪ぞかかりける)の歌詞は、メーソンが作詞して天心が訳したといわれる。ところがアメリカ帰りの伊沢修二が音楽取調掛長に就任し、これと合わず、明治一五年、内記課勤務となり、主として美術の仕事につくようになった。こうした天心の影には、当時、専門学務局の浜尾新がいつも庇護の手をさしのべていたらしい。

⑥ 河上徹太郎氏は『日本のアウト・サイダー』の中で次のように述べている。「天心は自分の理想を実現するに当時として最も可能性のある側の力を借りたのである。政治力はただ彼の方で利用したのであって、それによって彼に何の妥協もない。そこから彼の保守性を描き出すのは、今日の人間が今日の尺度で既往を計っているに過ぎない。」

⑦ 明治九年創立された洋風画の美術教育機関たる工部美術学校も、同年(明治一五年)一二月に閉鎖された。

⑧ 明治一二年、佐野常民を会頭として設立された団体。会に

は河瀬秀治、九鬼隆一など一九名が参加しており、毎月一回例会をひらき、べつに古美術の品評、鑑賞をも開催した。しかし新芸術を振興する力をもたないため、明治二〇年に解消した。

⑨ 「フェノロサは、裸体の婦人の画や、平凡の児女の画を嫌い、歐化主義を攻撃したが、そのような画も、作者次第では立派な絵が出来て、充分人を感動せしめ得るということを知らなかつたらしい。彼の西洋美術観の素人臭く甚だあやしいものであったことが分る。」

⑩ 明治二一年に宮内省に臨時全国宝物取調局設置(九鬼隆一取調委員長)、天心・フェノロサ等は取調委員に命ぜらる。これは、明治二九年古社寺保存会なる名称に変わり、明治三〇年には古社寺保存法の法律発布までこぎつけた。

⑪ 天心の反対側に立つ小山正太郎等は、「フィガロ紙」の記事を利用してふれまわったといわれる。

⑫ 『日本絵画三代志』創元社刊。

⑬ 明治二七年、美術学校の教育方針を変え、日本美術を三期にわけ、絵画科第一教室では古代巨勢と土佐派、第二教室では足利と江戸前期諸派、第三教室では江戸後期の技法を分期して教授するやり方を天心のイニシアチブで強行した。宮川寅雄氏は、この点について「天心の理論のもつとも悪い、保守的なのところが、こうした制度化としてあらわれたのである」と述べている。

⑭ 天心は自分を三太夫、相手を御前といったのである。

⑮ 天心の書簡の中に、森鷗外に宛てたものが二通あるが、それらは芸解剖学の教授依頼の手紙であって、個人的に親しくした史料は見当らない。

①⑥ 天心の趣味が、弓道、馬術、茶道、俳句などであった点もその性格の一端をあらわしている。

①⑦ 美術学校の図案科教授の福地復一を天心が嫌い、京都工芸美術学校に転職させようとしていたのを、福地はうらみ、二三の者と組み陰謀を計画した。彼らの仕組んだ怪文書には、「天心は一種奇怪なる精神病者」とまで評し、徹底的に悪罵のかぎりをつくした。こうした紛争の中で、天心はついに美術学校長の座を投げうつことを決意した。

①⑧ 日本美術院創設の時、天心は意を決して、ビゲロー（アメリカの富豪、日本、中国の古美術蒐集・研究者）にねがい、一万ドルを電送されたのであるが、その後の経済状態は思うにまかせなかった。

①⑨ 朦朧体とは、これまで行なわれた筆線を重んずる日本画の伝統手段に対して、その線描をやめ、色彩を重視して刷毛で塗抹する描法をさした当時のジャーナリズムの造語であった。朦朧体は、一面では認められたが、一般にはむしろ不評をもってむくいられ、明治三〇年代後半には、だんだんこの朦朧体を整理して、克服する工夫に入ってゆくことになる。

②⑩ 島崎藤村の「巡礼」（昭和二年）の中に、ガードナー夫人の、私邸でもあり、又、半公開的な美術館でもある「フェニウエイ・コート」をたずねた時の模様が次のように記されている。「わたしは『フェニウエイ・コート』の方を訪ねた時に、その建物の楼上の長い廊下の一隅に保存してあった夫人の好い形見をみつめた。夫人宛に諸方面の人々から書き送

ってきた手紙に、彼女の友なりしベルニソン、ヘンリ・ジェームス等が寄せたもの、ブラームスのような音楽家から寄せたもの、めづらしい筆跡の跡は、かずかずある中に、ドストエフスキーから来たふるい手紙がまじっているには驚かされた。」

②⑪ 亀井勝一郎「日本人の典型」の中の「岡倉天心」。

②⑫ 竹内好「岡倉天心」、『日本の思想家この百年』所収。

②⑬ 『近代日本思想史講座』八、「岡倉天心—アジアは一つについて—」。

②⑭ 宮川透『日本精神史への序論』、紀伊国屋書店。

②⑮ 下店静市講師ノートによる。

②⑯ 岡倉家の長男港一郎と三男の由三郎は、父母と共に暖かい家庭にあつたのに、天心のみは、貧しい寺の預け人として父の愛すらうすいものとなつた。天心はおつねという乳母に、「本当にあたいはお父さんの子なのかい、あたいは誰か別にお父さんがあるのじゃないかい」とたずねたという。ここに天心の言いようのない孤独な少年の姿がある。

②⑰ この歌は、美術院開設のころ、天心によつてつくられ、会員にうたわれたものである。

②⑱ 谷中鷲、初音の血に染む紅梅花、堂々男子は死んでもいい奇骨侠骨、閑落栄枯は何のその、堂々男子は死んでもいい
②⑲ 下店静市講師ノートによる。

②⑳ 牧野伸頭「回顧録」、昭和二四年、文芸春秋新社刊。

【付記】 本稿執筆にさいしては、下店静市先生の懇切な御指導を頂いた。記して深く感謝の意を表する次第である。